

赤き焰 渥美舊盆點描

なかじまやそいち
中島八十一

酷暑極まり果樹草木より發する熱れの何ぞ強烈なる。見ずして臭ひの正體を察するに足る。無花果の傍らを過ぐれば無花果の熟れるを覺え、トマトの傍らに立てば目を閉ぢたるとも、己にして色づくを知る。今日トマトは主要商品作物となり人家少なき郊外の廣大なる畑にて大々的に栽培するが常となり、庭先の露地にて熟するを見るは少なし。農家の自家用なればこそ完熟せしむるらめ。果實は限りなく赤し、切り裂けば種子を包容せるゼリーはひとときわ深き緑に映ず。

高き建物なき渥美半島の付け根に在る余が家に辿り着くまで本道を行かず集簇せる農家の境なす小道をわざわざ選びたるは舊盆を迎ふる季節を深く實感せんがためなり。東京にては園藝植物の流行の移ろひ早く、輸入せる品種の多ければ片假名書きの名稱氾濫し、かつての日本家屋と日本庭園を偲ばする草木は絶えて無し。ここにて目に留めたる靜かに咲ける檜扇の朱の花に幾十年かを遡る自らを見出せり。

いくらか氣の早き家より盆の準備調ひたるを告ぐる木魚の音流れ來て、熱氣の中を八丁蜻蛉は低く飛び來りて木賊の先端に停まれり。吹き出す汗に氣づけばかやうなる小道までアスファルト舗装し、照り返しの強きことかつて田園に見ることなき風物なり。余が家に着きたるに先づは戸たる戸をすべて開け放ち幾月か滞留せし空氣を換へたり。精靈棚の組み立てを始む。下り立ちて庭に咲ける白き百合を五本切り、閼伽水を水の子、位牌に掛くる禊萩を一枝摘み、茄子にはし木を挿し牛となす。精靈を迎ふる諸々の支度終へ座敷に仰向けに轉がりたれば、日の傾くに連れ門前の川を傳ひて海風緩やかに流れ入り、心地良さにいくらかの時間をまどろみたり。この海風の入り來る部屋、洵に此の世の極樂になぞらへであるべしや。

つくつく法師の鳴き聲に目を醒ませば早や夕餉の時となり、一通りの支度の調ひて、香を焚き、木魚を叩き、位牌と向かひ居るに、いささかの愁ひもなきは實に清々し。門口に三階菱の家紋を配したる提灯を灯し、門扉の内側にて迎へ火を焚けばこれを目掛けて精靈は訪ふ。舊盆の頃ともなれば日の暮ること明らかに早し。墓所を訪ひて今一度松を焚き、經を唱へ、寺位牌に向かひて精靈の來訪を歓迎して初日は過ぎ行けり。本堂の正面開口に立てば南天を地平に沿ひてのたうち回る蠍座の燃ゆるが如きアンタレスを見る。

都市化避けがたき田園地帯にあれど夜はいづくまでも夜なり。余が家の古びたれば都會にては得難き暗闇あり。ネオン管付きスイッチ無し、電子音また無し、車絶えたる時刻ともなれば光無く音も無き眞の暗闇を作り出さんこと容易なり。余は靈感に缺け日頃彼岸を實感せしこと無かれども、暗闇はかやうなる凡人にさへ部屋に何人かの訪ひたることを實感せしむるらん。さは誰なるを知らず、まして會話なしたることも無し、確かなるは余が祖先、諸精靈の訪ひなり。

一夜明るるに屋敷の門前を東西に走れる川沿ひの車道をいくたりかの人過ぎ行けり。海邊に通ずるこの道がかつて日露戰爭にて捕虜となれるロシア兵の收容所より海水浴に往來したること記憶に残

せし老人たちは余の若き砌には稀ならざりしかど、今は悉皆鬼籍に入りて、今やありしやなかりしやも定かならず。外つ國にて不幸にして逝きし兵の墓もありたりと傳へらるるに其の場所を知る者ぞなき。魄を喪ひし魂の盆を迎へてこの世に戻ることを叶はざれば遠きロシアを訪ぬることさらに叶わず。墓の位置を計るにこのあたりにあらずやと臆測するは余が家より約一キロ東に位置せる陸軍師團跡の近傍なり。殆どすべては民間轉用せられたるに一聯隊ほどの土地のみ市營公園として残り。生ひ茂れる松林は時を経ていづれも大木になりたるに、ほぼすべての太き幹に下向きの矢羽の形に表皮の剝がされ居るを見る。高さ一メートルの傷は先の大戦中に航空機用の松根油を採取せしことの証なり。形として残るものの後の世に向けて語ること多し。

何をおきても食事の準備こそ盆の務めにあらめ。かつて祖母はかやうなることにては曾祖母の満足全く得らることなかりきとつぶやきつつ、三度三度に飯、茶、汁を拵へつること思ひ出さば、此度の買ひ置きのおほぎを刻みて人數分となし日に二度のみ供ふることは杜撰の極みなり。我が妻言ふに子供いまだ幼かりし折、海水浴に連れ行かんと告げたれば我が母即座に我も行かんと車に乗り込み、供ふべき昼餉は見事に抜かれたり。妻抜け目なきにこの光景を記憶に留め、かかることもこの家にはあり得べしと四十年余を経て舌を出せり。

やがて坊主の来りて讀經始む。偈、般若心經、觀音經と續き、和讃の後に諸精靈に呼び掛くるに正味二十五分が本來の心算なり。菩提寺に三年前に代替わりあり、かつての二人體制より單獨行に移行せり。而して女衆の警戒これ如實たり、果たして經の始まるとともに席を立ち、冷茶、菓子、布施を持ち來れば正に經の終はらんとす。正味六分。坊主去り、一同新記録なりと笑ひたり。檀家周りのいつまで續きたらん。

靜謐なる時間も早三日目となり精靈の彼岸に戻る時となり、供物を牛に背負はせ伴となし、川に流したるは古のことなりき。今時はこれまでとして川端に線香を立つるのみ。併せて屋敷と墓所にて送り火を焚くは迎ふる時と變はるなし。松根の燃ゆる焰は取り立てて赤し。この焰を見つむること、幾世代、幾百年も繰り返したれば、見つむる余の顔は余にあらずして先祖の顔なり、その先祖の顔の裏にまたさらなる先祖の顔續き、あたかも合はせ鏡に人の顔次々と映れるごとし、諸精靈の余に宿りたる瞬間なり。

(令和元年八月二十六日受附)